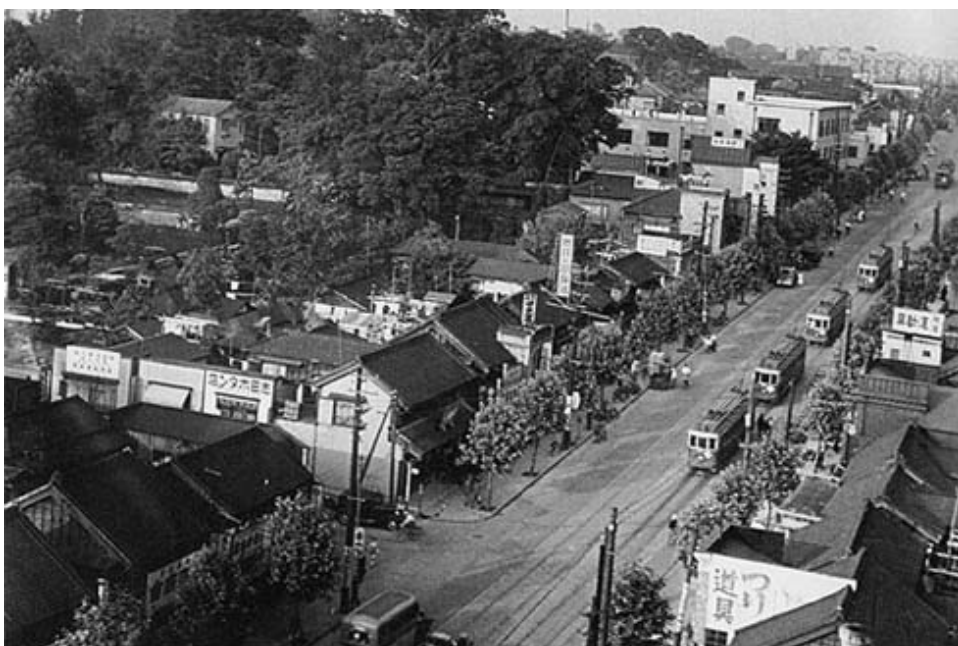


(4) 夕陽を眺める

加藤が中学生のときに住んだのは美竹町の2階家である。1階は診療所となっていて、2階の南西角の部屋は父信一の書斎であった。学校から帰った加藤は、その父親の書斎に入り込んで、夕食までの時を過ごした。西窓からは、遠く富士山までが見渡せた。夕暮れどきに空の色が刻々と色を変えてゆくのを眺めることを日課とした。



5年間の間、西の空の夕暮れを眺めることは、雨の日を除いて、私のほとんど欠かしたことの無い日課であった。5年間に

私の感覚がうけとったすべてのもののなかで、いちばん美しく、おそらくいちばん深く私を養ったものは、道玄坂の上の西の空であったかもしれない。(『羊の歌』「美竹町の家」)

(写真：左手上部の森の中に見える二階建てが加藤の自宅、渋谷宮益商店街振興組合(小林總一郎氏撮影)提供)